

昆布森地区の活性化活動について  
— 漁協女性部が地域に貢献できること —

昆布森漁業協同組合女性部  
部長 川原田 友子

1. 地域の概要

私の住む釧路町昆布森地区は海岸線が43km、漁家戸数が242戸、人口は1,260人の漁業中心の地区で、たこ岩等、風光明媚な北太平洋シーサイドラインの中にある。釧路町自体は釧路市に隣接しているため、住宅街(都市部)と農村地帯、そして漁業地帯である昆布森地区に大きく分けられる。都市部と第一次産業が両立している特色のある町である。

2. 漁業の概要

私達の昆布森漁協は昭和24年に設立され、16の地区と3つの漁港を有し、正組合員277名、准組合員12名で構成されている。名前の通りほぼ100%の組合員が昆布漁業に携わり、鮭定置網漁業とともに当漁協魚種の2本柱となっている。また当地区は海岸線の起伏が多く、好漁場となっており、かれい、うに、かに、ほっき、たこなど、多くの魚種の水揚げがある。

3. 研究グループの組織と運営

昆布森漁協女性部(婦人部)は昭和34年1月に240名の部員で発足した。現在は147名で、各地区ごとの地区会長を中心に活動を行っている。世代の交代が比較的スムーズに行われ、部員の平均年齢は40歳代である。その若いお母さん達を中心に、貯蓄運動、浜の清掃、植樹、料理教室などの活動と、各種イベントへの参加・協力、郷土芸能となった「たこ踊り」の継承などに力を注いでいる。また、救命胴衣の着用推進については、女性部員の9割が夫とともに昆布漁船に乗って命がけの仕事をしているので、率先して着用を行い、その着用率は100%である。

テーマⅠ. 「釧路町昆布森みなとまつり」

①-4. 研究・実践活動課題選定の動機

平成元年に漁協青年部と婦人部(当時)が中心となり、昆布森地区で採れるおいしく、新鮮な魚介類を地域住民はもとより、近隣の方々に知ってもらい地域の活性化を図るため、釧路町も協力し「みなとまつり」を開催した。婦人部も出店することとなり、初めての体験でみな不安はあったものの、手探りで鮭鍋やおでんなどを作り出店した。

しかし、原因となった食品の特定はされなかったが、食中毒が発生してしまった。幸い重症者は発生しなかったものの、スタートとしては芳しくないものであった。

第一回目がこのような結果になってしまい、今後の開催についていろいろ話し合いをしたが、信頼の回復のためには是非やらなければ、との機運が盛り上がり、みんな

で出来る限りの協力を行う結論となり、いくら丼、鮭鍋、イカ炭焼きなどの出店を行った。もちろん、各行政機関などと連携し指導を受け、食品の安全には万全を期して。

#### ①-5. 研究・実践活動状況及び効果

その後、女性部の店は各部落ごと出店し、ピークでは14地区14店を開き、鮭鍋1,200食、麺類1,500食、焼き鳥2,500本、おでん1,200本など、合計12,000食を用意し「みなとまつり」の中核を担うまでとなった。現在も、鮭の串焼き、鮭鍋、昆布ごはんなど、昆布森地区ならではの新鮮な素材を使った料理、でんぷん団子など懐かしい味、一息ついてもらうそば・うどんなど、いずれも部員の手作りでおよそ10,000食を用意し、来訪するお客さんを迎えている。これらを食べるのを楽しみに毎年「みなとまつり」に来る方々も多く、長蛇の列を作り買い求めていただいている。

#### ①-6. 波及効果

今年でこの「みなとまつり」は17回を数え、「昆布森地区」ではなく釧路町の一大イベントとなっている。

多い年では、2万人もお客さんが来訪しており、近隣の釧路市はもとより、遠くは帯広・札幌方面からも多数のお客さんが来ている。この「みなとまつり」を通して多数の方が「昆布森の魚は新鮮でおいしい」ことを知ってもらっていること、そして何よりも実際にここに来て「昆布森」を見て、知ってもらっていることに喜びを感じ、そして女性部がその一翼を担っていることに充実感を感じている。

また、以前から各地で取組んでいる「地産地消」や、昨年、高橋はるみ知事が道民運動として宣言を行った「産消協働運動」の取組は、いずれも地元の特産品を地元で消費、活用することで、これまで以上の地域活性化を目指しているものだが、私たち女性部もこれまでの取組を通して、知恵をしぼり、工夫を凝らすことによって地域の活性化が何倍にもなることを知った。

### テーマⅡ. 「ピカリン大作戦」と「植樹」活動

#### ②「ピカリン大作戦」活動

##### ②-4. 研究・実践活動の課題選定の動機

昆布森地区では、二十年ほど前から地元の小学校の児童会が「ピカリン大作戦」という活動を続けている。これは地域の美化・前浜の清掃活動を行っているものであり、「きれいにする」意味で「ピカ」、「リン」は語尾につける愛称である。しかし、近年の過疎化、少子化により、小学校の児童数も減少し、なかなか思うような成果を得られない状況が続いていた。そのような状況を知り、地域の清掃、ましてや前浜の清掃を子供達だけにやらせ、大人が何もしないわけにいかないと考え、平成12年から女性部員も小学生と協力して「ピカリン」活動を行うこととした。

##### ②-5. 研究・実践活動状況及び動機

現在、毎年5月と10月に一緒に清掃に汗を流しているが、昆布森で育った子供達は大きくなってもゴミのポイ捨ては出来ないと感じるし、家庭や地域での健全育成の環境作りを大切にして行きたいと考えている。

### ③「植樹」活動

#### ③-4. 研究・実践活動課題選定の動機

当漁協では女性部が主体となり、10年前から植樹活動を続けている。毎年6百本ほどを目標に、地元のチョロベツ川沿いにミズナラ、ななかまど、桜などを植えている。これは、地域に自分達が安心して豊かな気持ちになれる自然を残し、また地元を離れた方も帰ってきた時に「ここがふるさとで良かった。」と感じてもらえる「昆布森」でありたいとの願いと、海に豊富な栄養を与え、昆布が豊かに繁茂し、鮭が川に帰って来ることを願い、始めたものである。

#### ③-5. 研究・実践活動状況及び動機

10年前に始める時は場所探しに苦勞をしたが、釧路町長の協力で町有地の提供を受け、植樹がスタートし、現在は川沿いの民有地におよそ総数5,000本の植樹を行っている。毎年の植樹には当漁協の組合長や釧路町長も参加して、地域の重要な事業となっている。

#### ③-6. 波及効果

また、平成12年からは「ピカリン」で連携した地元小学生も参加し、大きな広がりを持つ事業に成長している。子供達とのこの「協働」作業は、「ピカリン」とはまた違い、子供達にとって将来自分の植えた木の成長を見て、何か感じてもらえるものがあればいいなと願っている。

## 7. 今後の課題や計画と問題点

当地区の漁業は、3月のカキ、拾い昆布から始まり、春定置、棹前昆布・なが昆布、鮭定置、うに漁が続き、いわゆる「漁閑期」がなく一年中漁業が行われている。特に昆布漁はほぼ全組合員が操業しており、女性部員のほとんどが夫とともに乗船し漁をし、「オカ」に上がれば家族総出で昆布干し作業を行っている。このような中で、それぞれが自分のできる範囲で、懸命に活動に参加している状況である。

当漁協の女性部は若い層が比較的多い方であるが、地域人口の減少、組合員の減少、意識の変化等々により、女性部員数の減少がなかなか止められない。

また、近年の厳しい漁家の経営環境においては、各漁家における妻たちの漁労負担は減ることはなく、女性部活動を行う時間も制約せざるを得ない状況であり、このままでは、今後の女性部活動が先細りしてしまう懸念がある。部員はみんな、それぞれの仕事を持っており、活動はしたいが本来の仕事をおろそかに出来ない、との悩みを持っている。そこが、女性部活動における最大の悩みである。

そうならないためには、無理をせず小さな事でも自分達ができる活動を行うこと、強制・無理強いせず、各自の都合のいい時に協力してもらい助け合おうという雰囲気作り、そして、活動の効果・充実感などを部員一人一人が感じてもらうことが重要だと考えている。現在行っている、地元の小学生との「協働」体制、イベントなどへの参加・協力、植樹など、地域の活性化に貢献をしているという実感が活動の支えになると思っている。

今後もこのような活動を続けていきたいと考えている。

「みなとまつり」-①



「みなとまつり」-②



「みなとまつり」-③





「ピカリン大作戦」①



「ピカリン大作戦」②





「植樹活動」-①

「植樹活動」-②



「植樹活動」-③

# 図地繪町路訓

これが大かんげき釧路町です。

- 大展望から釧路湿原をのぞみ
- 大自然の雄大さに感動する……
- 遠古武沼で夏はキャンプ、冬はワカサギ釣りをして、
- 大自然と遊ぶ楽しさを満喫する……
- 北太平洋シーサイドラインにそって昆布森海岸の奇岩と出会い、
- 自然界の驚可不思議を体験する……
- 手つかずの原始林、シレバ自然休養林を探索して
- 大自然の美しさを実感する……
- 釧路町の先端に立って、力いっぱい、オーイっ叫んでみる
- 地球サイズの返事が聞こえてくる……



わがまち釧路町は、  
海岸線の荒々しさが自慢、  
咲き乱れる花々が自慢、  
そして雄大な釧路湿原が自慢です。

- 車両通行不可
- 国道
- 道道
- (K 数は小数点以下を)  
切捨てています。